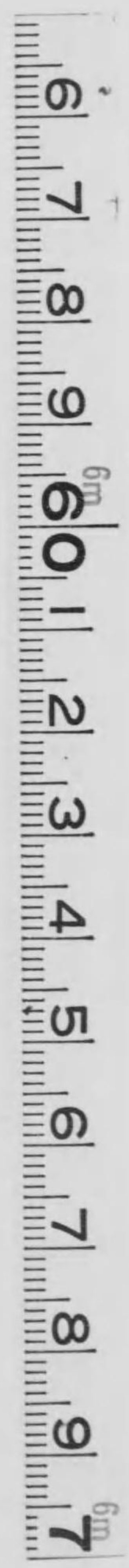


60
511



始



2.7.30

11
11
11

オリウ

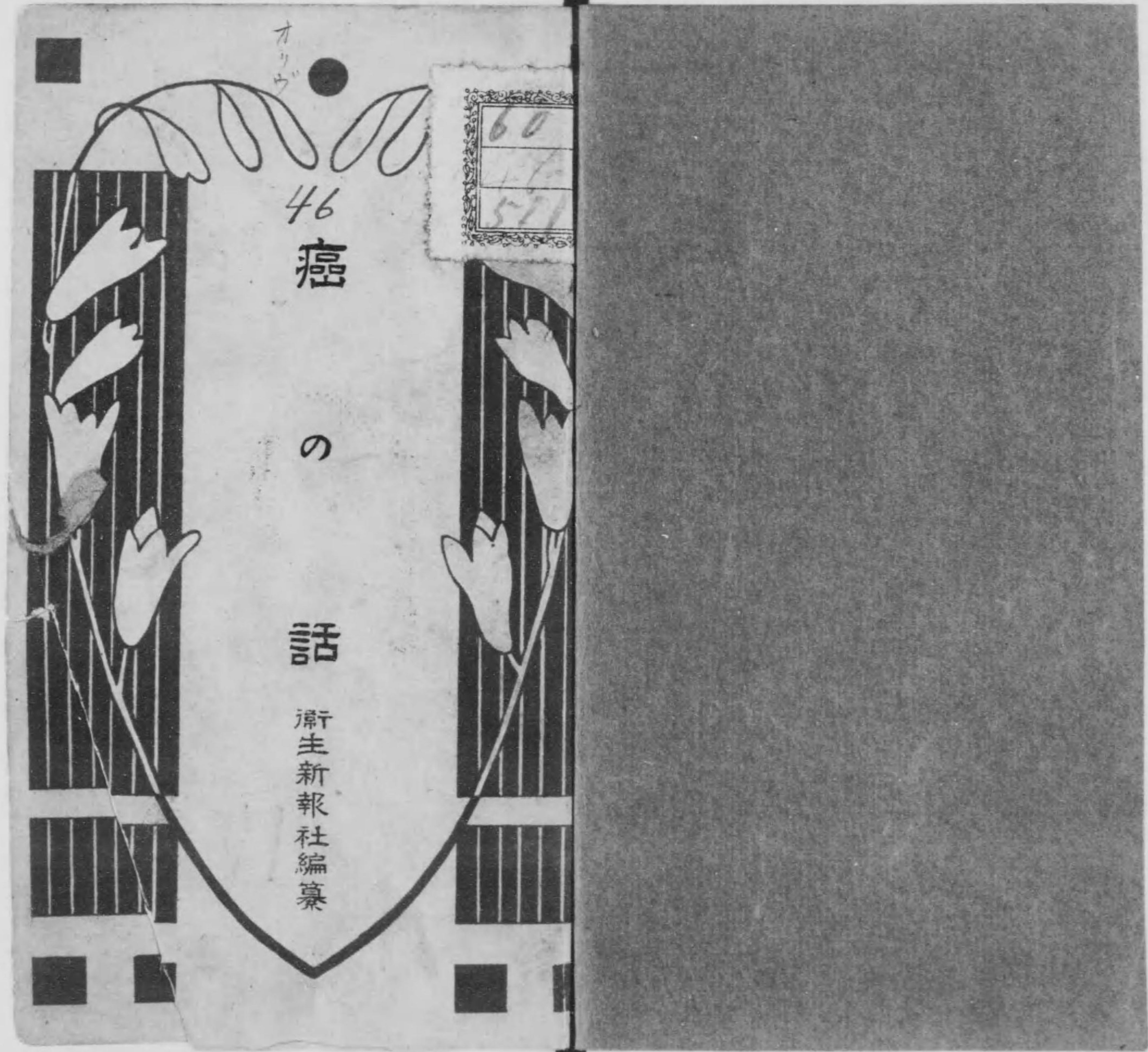
60
571

46
癌

の

話

衛生新報社編纂



60-511

編纂の辭

昔は病氣の數を四百四病と云つたものであるが、世が文明に進み、生活が複雑になるに従つて病氣の數も亦殖えて來るのは各國皆然りで、實に今日では何千と云ふ程病氣の數は多くなつたのである、従つて吾々の病氣に侵さるゝ機會も昔の人よりは遙かに多くなつたと云はねばならぬ。

我々の身體には何が大切と云ふても健康程大切なものは無正
く、また身體の健康なる程幸福なものは無、従つて吾人は
平素力めて攝生其他に注意して健康を保持せねばならぬ。け
れども不幸にして一旦病氣に罹つた時には、速かに醫師の治
療を求むべきは勿論である。併しながら或場合に於ては病初
に於て家庭にて施す些少の手當は、時を経て後行ふ名醫の施

6. 8. 7
内交

術よりも遙に其豫後を佳良ならしむる場合もあり、又醫療を受くるにしても、其病の性質を知り居ると云ふことは何かに就て大切のことであり、また病の性質を知つて居れば或はこれを未然に防ぐことも出來得るものである。即ち一般家庭に醫學、衛生上の知識の普及と云ふことは、吾人の保健上最も緊切のことであつて、また文明國民の義務なのである。吾人が家庭醫學叢書を發行する所以も亦實に此醫學衛生思想の普及に存するのであつて、即ちこれによつて事無きには疾病豫防上の指南車となり、病者に向つては最善の相談相手たらんことを期するである。

大正丁巳歲梅雨の日

編纂者謹識

凡例

一、癌は學者間になか／＼入釜しい問題である、痛で死ぬものが多いだけに、これを研究する人も多いのであるが、未だ判然と判つて居らぬ。癌に就ては獨逸を初め數多の文明國が、特別の機關を設けて研究して居る、我國に於ても癌研究會を起して専心研究に従事して以來約十一年になるが、未だ根治法が発見されてない。

一、併し熱心なる諸學者殊に我國の學者によりて追々其本態も分明になりつゝあるを以て遠からず根治法を発見するに至るであらう。

一、本書は此の恐るべき癌に就て、醫學博士長與又郎先生の講話を得て之を編せるものであるが、事情ありて先生の校閲を経るの遠なかりしを以て、本社の編纂となせるが、其の材料の大部分もまた同先生より得たるものである、茲に謹

んで先生の御厚意を感謝するものである。
一、要するに癌の全體に就ては、未だ不可解の點あるも、其の大部分は本書によつて伺ひ知ることを得るものと信するのである。
一、戦争は國民と國民との争ひであるが、疾病の研究は疾病と人類との争である世人は戦争に向つては多大の注意と犠牲とを拂ふて居るが、人類全體の敵なる疾病の研究に對しては餘り注意を與へて居らぬ、今此の書を編纂するに至つて殊に此の感を深くするものである。

大正丁巳歲梅雨の日

編纂者謹識

家庭醫學叢書
第四十六編 癌 の 話 目次

第一章 癌とは何ぞや……………一

昔からある病氣||悪性腫瘍の一つ||良性腫瘍と悪性腫瘍||種類||發育の速||どうして痛となるか||狂人と同じ||退治の出來ぬわけ

第二章 癌はどうして起る乎……………四

先天にもある||後天性多し||素因遺傳||遺傳の統計||癌の原因となる病氣||癌に變化||原因的關係の統計

第三章 癌の年齢的關係……………一九

細胞の畸形と見る||老年に多し||癌の發生年齢||原發癌と平均年齢||最低最高位に平均年齢||最高及最少年齡

第四章 癌の發生部位……………二

何處にても發生す 發生部位統計の一 統計の二 統計の三

第五章 癌の發生と性の關係……………三

日本に於る統計 外國の統計 癌の割合

第六章 他動物にも癌がある乎……………四

動植物にもある 動物諸臓癌發生の割合 癌は移植し得

第七章 治療はどうする乎……………五

各國研究の有様 日本の進歩 成功の時を待つ 治療の方法

第八章 豫防は出來ぬ乎……………六

前驅症の根治 根治法少し 根本的の方針を定めよ 細胞と自己本位

第九章 癌は殖えるか否乎……………七

西洋では殖える 國による 職業の關係 文明人に多し 統計的觀察

第十章 何故癌を恐るゝ乎……………八

豫防が必要 前驅症を恐れよ 根本的の理解

第十一章 胃 癌……………九

胃痛は最も多い 原因 外因と内因 解剖的の變化 發生する部位 部位と經過の關係 經過 轉位 早期診斷の必要 初期の徵候 胃部の結節 作用の減弱 胃液の變化 確かな診斷法 療法 藥物的療法 死の宣告か 外科的療法 胃の除去と生命の關係 早期に手術が必要 一縷の光明 X光線療法

第十二章 子宮癌……………一〇

子宮癌は多し 原因 年齢の關係 症候 三徵候 出血 白帶下 疼痛

|| 經過 || 療法 || 獨逸婦人學會の注意

家庭醫學叢書 第四十六編 癌 の 話 目次終

家庭醫學叢書 第四十六編 癌 の 話

衛生新報社編輯局編纂

第一章 癌とは何ぞや

音からある病氣 癌は太古からある病氣であつて、支那にも昔からあり、日本にも昔からある病氣である。また西洋では既にヒポクラテス時代からあつたもので、其の由來は甚だ古いものである。

悪性腫瘍の一つ 癌は何であるかと云ふに、身體の表面を被ふて居るところの外皮、消化器、其他の器官の表面を被ふところの所謂上皮、或はいろいろの腺の細胞から出來るところの一つの性質の悪い出來もの、腫物、即ち新生物であつて、其の人の組織の

良性腫瘍
と悪性腫瘍

種類

發育の速

痛として
痛となる

細胞が癌の細胞となるものである、決して外から入つて来たものでない。我々の身體の中には、癌と同じ腫瘍であつて、性質の良いものと、悪いものとある。性質の良いものでは疣とか、または背部、耳等に出来る脂肪腫の如きもの、或はまた鼻茸の如きもので、此等は良性腫瘍と稱するものである。それから悪性のもの、即ち性質の悪いものでは、肉腫、癌腫等があるが、中には癌は一番多く、性質悪しく、人間に取つては重大な厄介物である。

癌には、いろいろ種類があつて、其の色、形状、硬度等が各々異なるばかりで無く、顕微鏡的に其の構造が異つて居る、即ち癌細胞の形が異なるものがある。また癌の中には比較的發育が遅くして、盛んで無いものもあるが、また中には發育早くして、どん／＼周囲組織を侵蝕して、遠方にまでも飛火すると云ふやうな、其の性質の極めて悪しきものもある。

癌は、其の固有の組織から出来るものであつて、つまり健康組織の細胞が癌

狂人と同

細胞に變るのである、然らばどうして變るか云ふに、これはいろいろ議論がある。或は細菌が關係するとか、原因があるとか、或は寄生物が寄生した爲めであるとか、いろいろ説を立てる人もあるが、此等は殆んど勢力が無い説である。癌は結核や梅毒とは其の關係が違ふもので、癌病や其の他の傳染病のやうに、特別の病原體があつて起るのではない。自身にもと／＼あつた細胞が、癌細胞と變るものであつて、早く云ふと兄弟の中に狂人が出来たと同じ關係である。

そして其の蕃殖力が非常に強くして、忽ちうちに大きくなる、また食欲も強くして、營養を多く吸収し、一面悪いものを分泌するもので、頗る利己主義な自分さへ發育すれば他はどうでもかまわぬ、子孫はどうなつてもよろしい、他の組織にはどんな悪影響があらうが、そんなことは一向平氣であつて、唯々自分の領地を擴める、組織をひた押しに壓し、そして機會があれば、血液や淋巴液の助けによつて、遠くにまでも飛火して、其處でまた自分だけ肥えたと云ふのであ

退治の出来ぬわけ

先天にもある

つて、丁度そう云ふ性質の狂人が人間の中に出来たと同じである。此の關係からして、人間が人の身體の中に健康な細胞のみどころへ、精神的の癌細胞が出来るのであるから、癌細胞即ち精神病者を退治するには、唯其の精神病者のみを退治すると云ふことは出来ぬ、健康者―健康細胞も共に殺さればならぬのであるから、其處が即ち治療の困難なる點である。傳染病とは生物學的の關係が違ふのである。癌は外から狼藉者が入つて来たのではなく、家の中に精神病者が出来たのである。

第二章 癌はどうして起る乎

癌はどうして起るか、即ち其の原因は何であるかと云ふに、それも精神病と同じ關係であつて、先天的にも、また後天的にもある。先天的には赤ん坊が産れる前に立派な癌を持つて居つて、産れてすぐに癌があり、それがどしく

後天性多し

素因遺傳

大きくなるのもあれば、また十年二十年の後に大きくなるものもある。此の十年二十年の後に大きくなるものも、矢張り始めは、産れたときに、其芽ざしがあるものがある。

けれども全體から云ふときは、生來癌を持つて居るもの、即ち先天的のものはいくつか、大部分はいろいろの關係によつて、生後に癌となる所謂後天性のものである。

後天性の原因には二つある、一は癌の種は持たぬが、健康の細胞が癌細胞に變り易い性質、即ち素質を持つて居つて、一定の原因があると、罹り易い。丁度結核患者の子供には、結核に罹り易い素質を持つて産るゝと同じ關係であつて、癌の系統は矢張り素質の關係がある。西洋の統計によつても、また日本の統計によつても、素質の傳へることは認めて居る、彼の有名なるナボレオンの如きは父と二人の姉妹が胃癌に罹り、ナボレオン自身は、矢張り胃癌に罹つて居る、これ

遺傳の統計

は痛系統として有名なるものである。

痛の遺傳的關係に就ては内外共に諸家の統計があるが、茲には飯塚氏が明治三十八年一月より大正三年八月に至る、約十ヶ年間に於ける東京醫科大學近藤外科教授室の統計を示さん(痛十年一冊)

臓器名	遺傳を證明し得る者	百分率	遺傳を證明し得ざる者	百分率
胃 痛	三二	二三	一〇〇	七七
乳 痛	一七	一四	一〇四	八六
直腸 痛	九	八	九九	九二
上 顎 痛	三	六	四七	九四
舌 痛	三	六	四七	九四
食道 痛	二	九	二一	九一
表皮 痛	〇	九	一九	〇〇

陰 莖 痛	三	一三	二〇	八七
肝 臟 痛	二	一八	九	八二
口 蓋 痛	一	九	一〇	九一
頸 部 痛	一	〇	九	九〇
喉 頭 痛	一	一三	七	八七
口 底 痛	一	一三	七	八七
扁桃腺 痛	〇	〇	七	一〇〇
下 顎 痛	一	一四	六	八六
膽 囊 痛	〇	〇	四	一〇〇
子 宮 痛	〇	〇	二	一〇〇
甲 狀 腺 痛	〇	〇	三	一〇〇
口 唇 痛	〇	〇	三	一〇〇



二	一	七	三	
		二		
		一		
一	一	二		
		一		

三	一	四	三	一
---	---	---	---	---

更に遺傳の父系、母系、直系、傍系に於ける關係を表示すれば左の通りである。

胃
腺乳
腸直
顎上
舌
道食
腸
莖陰
臟肝
蓋口
部頸
頭喉
底口
顎下
計總

表皮痛	直腸痛	頸部痛	舌痛	子宮痛
二	一	一	二	四
			二	一
				一
二	二	三	四	二

九

食道痛	乳痛	腸痛	喉頭痛	胃痛	胃腺乳腸顎上舌道食腸莖陰臟肝蓋口部頸頭喉底口顎下計總	攝護線痛	脾臟痛	睾丸痛	尿道痛
一	五	一		二	二	四	八	五	一
四	五	一		四	一	八	五	一	一
一	一			一	一	一	一	一	一
				一	一	一	一	一	一
				一	一	一	一	一	一
				一	一	一	一	一	一
				一	一	一	一	一	一
				一	一	一	一	一	一
				一	一	一	一	一	一
八	六	三	一	五	四	七	八	二	七

次に如何なる臓器よりの遺傳最も多きかと云ふに、

合計	七八	一一、七三	五八七	八八、二七
----	----	-------	-----	-------

八

癌に變化

原因的關係の統計

じ、それから舌癌となるもの、食道が荒れて潰瘍を生じ、次で食道癌となり、胃潰瘍の後に屢々胃痛が生じ、腸のいろ／＼な潰瘍から腸癌が発生し、子宮腔部の糜爛から子宮癌が生ずる等は、統計上之を證明するところのものである。

其の他肝硬變症から肝臓癌が発生し、胆石症から膽道に癌が出来、乳腺炎から乳癌を發生する等、いろ／＼の炎症からして、癌を發生する。此等のものが前驅症として、直接間接の原因となり、上皮細胞が癌細胞に變ずるのである、即ち後天性に身の中に狂者が出来るのである。要するに前驅症があつて、其處に慢性的器械的、化學的の刺激が加はり、上皮細胞が悪くなつて、遂に癌に變化するのである。此等の前驅症から癌に變生するまでには、大分長くかゝるが一旦之れが出来ると非常に早く發育するものである。

今臨床上癌發生の原因と見做さるべき事項を擧げ、其の百分率を示さん（前項同様飯塚氏の統計による）

A 胃痛 一六六例

一、酒

飲酒家 五三例

三二%

嗜まざる者 二六例

一六%

其の他はこれが記載を缺く、飲酒家五十三例中三十八例は大酒家にして、少くとも晩酌二合以上を必要とす、而して厭酒家の多くは女子なることは論を俟たず、

二、慢性胃疾患 一九例

一一%

幼年時若くは發病數年前より慢性胃加答兒の症狀を呈したるもの。

三、胃潰瘍 一一例

七%

此中三例は手術の結果腫瘍が胃潰瘍痕上に形成せられたることを確かめたりと雖も、他の九例にありては、患者の陳述により、嘗て胃潰瘍を経過せし

ならむと推定せし者なり、而して此等の多くは胃液検査の結果は、遊離鹽酸の
 反應陽性にして、其總酸度は平均五〇なり。

B 乳癌 一三一例

一、乳腺炎 一六例 一二%

乳腺炎經過後に癌の發生せしと思はるゝ者。

二、外傷 二例 一、五%

乳腺部に挫傷を受け、これ聯繫して腫瘍の發生せしと思はるゝ者。

C 直腸癌 一一七例

一、痔核 一七例 一五%

二、常習性便秘 六例 五%

三、痔瘻及痔裂 七例 六%

四、脱肛 三例 三%

D 上顎癌 五九例

三例 三%

一、煙草 一七例 二九%

喫煙家 一七例 二九%

嗜まざる者 九例 一五%

二、外傷 四例 七%

上顎部に挫傷を受けたる既往症を有する者。

三、鼻茸 五例 八%

四、上顎竇蓄膿症 一例 一、七%

E 舌癌 五四例

一、煙草

喫煙家 三二例 四一%

嗜まざる者

二例

四%

二、酒

飲酒家

二二例

四一%

厭酒家

一〇例

一九%

飲酒家十五例は大酒家にして、他の七例は少量を嗜むのみ。

三、舌白斑 四例 七%

舌白斑部より腫瘍の発生したる者。

四、齶歯及義歯 一三例 二四%

齶歯の尖端にて、又は義歯の適合せざる爲め舌は絶えず刺激を受け、此部に腫瘍を形成したる者。

五、口腔炎並に舌炎 三例

六%

六、小結節 二例

四%

舌に小結節を生じたるを以て、硝酸銀を以て絶えず腐蝕療法を受け居たりしに、此所漸次膨大し腫瘍を形成したるもの。

F 食道癌 五三例

一、酒

飲酒家

二八例

五三%

厭酒家

三例

六%

其他は飲酒に関する記載を缺く、飲酒家中の五例は大酒家にして、三例は少量を嗜むのみ、而して飲酒家の大部分は男子なることは胃痛の條下に記載せると同様なり。

G 表皮癌 二七例

一、火傷癍痕

八例

三〇%

患者の陳述するところによれば、火傷を受け、これが治癒し、其癍痕上に漸

次腫瘍の發生せし者。

二、外傷性瘰癧 一例 四%

三、慢性潰瘍 一例 四%

潰瘍の性質は不明なれども、下肢に於て永く治癒せざる潰瘍ありて、其の創面より漸次腫瘍を形成するに至りたる者。

其他下駄の鼻緒にて絶えず刺戟せられたる拇趾表皮の腫瘍の發生せし一例あり。

II 陰莖癌 二三例

一、包莖 二二例 九一%

二、龜頭包皮炎 二例 九%

三、龜頭疱疹 一例 四%

細胞の畸形と見る

老年に多し

癌の發生年齢

第三章 癌の年齢的關係

我々の身體は、數萬の細胞が相集つて出來たもので、其の細胞は上皮は上皮細胞、腺は腺細胞と云ふ風に、各々相異つて居り、各々同種類の細胞が相集つて上皮となり、腺となり、それがまた更に相集つて人體を組織するものであつて、實に巧妙な極めたものであるが、其の細胞に一種の畸形、つまり一つの畸形とも見るべきものは癌細胞の發生である。

癌は年齢に關係があるもので、比較的年を取つた人に多い。即ち四十歳乃至六十歳の人に多いが、八十歳九十歳と云ふ高齢になれば反つて少くなる。今これに就て二三の統計を擧げて見よう、第一に記すは飯塚氏(前掲)の統計である。

胃	九歳	一九歳	二九歳	三九歳	四九歳	五九歳	六九歳	七九歳
臟器	一	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇
	六	三二	五三	五六	五			二

脾 睪 膀 尿 卵 口 甲 子 膽 下 扁 口
 臟 丸 胱 道 巢 唇 狀 宮 囊 頸 桃 腺 底

三

一
 一 二 一 三 二
 一 一 一 三 四 一 一 二
 一 一 一 三 四 二
 一 一 一 二 四 四
 一

喉 頸 口 肝 陰 表 腸 食 舌 上 直 乳
 頭 部 蓋 臟 莖 皮 道 頸 腸 腺

一
 一 一 一 二 一 一 九 八
 一 一 二 二 九 二 六 〇 二 三 三
 一 四 二 五 四 二 九 一 三 一 〇 一 五 三 四 三 四 三
 三 五 二 四 六 八 六 二 七 二 一 二 二 三 六 三 三
 三 五 二 八 二 六 八 一 三 一 〇 一 六 九
 一 一 二 二 三 一 三 一 三

三

攝護線

總計 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

また東大醫科病理學教室に於ける明治二十七年より大正三年に至る二十年間の癌統計により石橋鷹津兩氏の報告せるものは左の通りである。(癌第九年第三册)

原發部と平均年齢

原發部	石橋、鷹津	平均年齢	ステインハウス	バナー
卵巢	四〇、〇	五〇、九		四六、二
盲腸	四二、〇			
子宮	四三、〇	五六、七		四五、六
肝	四四、二	五二、六		四九、五

原發部	平均年齢
直腸	四五、二
十二指腸	四七、四
陰莖	四八、〇
上顎	四八、五
乳腺	四九、四
胃	四九、三
膀胱	四九、三
肺	五〇、五
陰唇	五一、〇
食道	五一、八
頭頸	五一、八
咽喉	五二、〇

胃	乳	直	上	舌	食	腸	表	陰	肝	口	頰
腺	腸	顎	道	皮	莖	蓋	部				
二〇	一九	二一	二八	二三	二五	二八	一九	二七	四	三四	四四
七二	七二	六九	七二	七五	七六	六五	七八	七八	六一	七三	七三
四六	四五	四二	五二	五四	五一	四七	五一	五五	四七	五六	五三

三三

最低最高
並に平均
年齢

脾	舌	腎	輸	口	膽	頸	攝	副
管	腔	囊	部	腺	腎	腎	腎	腎
五二、四	五二、九	五三、〇	五四、七	五五、〇	五六、〇	六四、四	七〇、三	一五、六
五五、九	五六、〇	五七、〇			五九、三		六五、五	
五八、三	五四、九				五五、二		六四、五	

三三

左の通りある。(飯塚氏)

更に各臓器に於ける痛發生の最低年齢、並に最高年齢、並に平均年齢を示せば

胃 食道 肝 子宮 直腸 膽囊 輸尿管 膀胱 舌 甲状腺 上顎

最高年齢
 七四 七一 六五 七二 八五 七五 六九 七八 六五 六三 六八

最少年齢
 二四 三六 二四 二二 二〇 四三 二四 三〇 二二 三一 四〇

最高及最少年齡

喉頭 扁桃腺 扁桃腺部 下腹部 膽囊 子宮 甲狀腺 口腔 卵巣 尿道
更に石橋、鷹津兩氏(前掲)の最高年齢及び最少年齡を擧ぐれば左の通りである。

四七 四一 三五 四五 四二 三二 三三 四九 二六 四三 二六 三八 七〇 四五 四七 五九 六五 六五 六一 七一 五八 五七 五三 五五 五〇 四一 四五 六二 三二 四七

云

腎 大 頸 膝 副 喉 盲 口 乳 十 唇 肺
 氣 二 指
 管 部 腎 頭 腸 腔 腺 腸

六六 五一 七八 七二 三一 六一 六一 六三 五六 五六 七二 五一
 五六 五一 五一 二六 七 二七 二八 三九 四〇 四〇 三〇(一九) 三六

元

咽 腦 卵 陰 攝 陰
 頭 巢 唇 腺 莖

六四 五七 五六 六九 八三 五九
 二八 二三 二一 三三 六四 三三

第四章 癌の發生部位

何處にても發生す

痛は、どんなところに多く發生するかと云ふに、子宮、腫、乳腺、胃、腸、膀胱、直腸、肺、肝、陰莖、皮膚、口唇、舌、食道等に最も多く發生するが、一體痛は上皮細胞より發生するものであるから、上皮細胞のある處は何れの場所でも發生し得るものである。今其れに關する二三の統計を示さん、第一は飯塚氏(既

三九

口	甲	子	膽	下	扁	口	喉	頸	口	肝
狀					桃					
唇	腺	宮	囊	顆	腺	底	頭	部	蓋	
三	三	六	七	七	七	八	八	一〇	一一	一四
〇、三九	〇、三九	〇、七九	〇、九三	〇、九三	〇、九三	一、〇六	一、〇六	一、三三	一、四六	一、八六

三

發生部位
統計の一位

陰	表	腸	食	舌	上	直	乳	胃
莖	皮	道		頸	腸	腺		
二	二	三	五	五	五	一	一	一
三	七	一	三	四	九	七	三	六
三、〇五	三、五九	四、一二	七、〇四	七、一四	七、八四	一五、五四	一七、四〇	二二、〇五

損の統計である。
癌統計七百五十三例中、其の原發脱器名は左の如し。

部位

總數

百分率

三

統計の二

部	部位	總數	百分率
卵巢		二	〇、二七
尿道		二	〇、二七
膀胱		一	〇、一三
睪丸		一	〇、一三
睪腺		一	〇、一三
攝護腺		一	〇、一三
子宮		四六〇	三三、五三
子宮		四三四	三二、〇〇
胃		八五	六、二〇
腸		七八	五、六九
乳房		七	〇、一三
直腸(含)		七	〇、一三
總數		一四一〇	

名古屋好生館佐藤勤也博士の報告

統計の三

部	部位	總數	百分率
肝臟、膽囊		四二	三、〇六
外		三五	二、五五
舌		二六	一、九〇
陰莖、包皮		二二	一、六〇
食道		二一	一、五三
鼠蹊腺		一七	一、二四
胃		一〇四	四、五、一〇
腸		二六	一、〇、九七
肝臟、膽囊		二三	一、七〇
食道		一四	一、〇、一〇
總數		一三三〇	

東京病理學教室山極教授の報告

子 肝 喉 卵 膀 舌 乳 上 陰 膝 甲
 宮 頭 巢 胱 房 頸 莖 腺 狀

一〇 八 七 五 五 五 五 三 二 二

四、二〇
 三、三七
 二、九五
 二、一〇
 二、一〇
 二、一〇
 二、一〇
 一、二六
 〇、八四
 〇、八四

言

第五章 癌の發生と性の關係

男子女子の何れが多く癌に犯さるゝやと云ふに、女子の罹患數は遙かに男子よりも多く、其原因は、女子は男子に見る能はざる子宮痛並に乳痛に犯さるゝことと多きが爲めなりと稱するも、統計によれば必ずしも然らざるやうである、今統計によつてこれを證せん。

日本に於ける統計

飯塚氏の報告例

種類	女子	男子	女子と男子との比較
胃痛	四八	一一八	一と二、五
乳痛	一三〇	一	一と〇、〇〇八
直腸痛	三五	八二	一と二、四
上顎痛	一七	四二	一と二、五

三

外國の統計

千九百十年マイルハーベル氏が、伯林に於て三十歳以上の癌死屍に就ての統計

部位	癌種	例数	年齢	死亡数
舌	癌	9	13	6
食道	癌	9	44	9
腸	癌	31	18	4
表皮	癌	5	22	1
陰莖	癌	0	23	1
肝臓	癌	5	11	1
口蓋	癌	0	9	1
頸部	癌	2	8	4
喉頭	癌	1	7	7
口底	癌	1	7	7
扁桃腺	癌	0	7	0
下部	癌	1	6	0
膽囊	癌	3	4	1
子宮	癌	6	1	5
甲状腺	癌	2	1	2
口唇	癌	1	2	0
卵巣	癌	2	0	0
尿道	癌	2	0	0
膀胱	癌	0	1	0
睪丸	癌	0	1	0
唾腺	癌	1	0	0
攝護腺	癌	0	1	0
總計		293	460	

種類	女子	男子	女子と男子との比
食道癌	二五	一一三	一と四、五
胃癌	三三八	三九九	一と一、二
腸癌	一〇三	一〇〇	一と〇、九七
肝臓癌	一〇八	八四	一と〇、七八
膽嚢癌	二一	一三	一と〇、六二
脾臓癌	五	七	一と一、四
子宮癌	三〇二	〇	
皮膚癌	三	四	一と一、三
直腸癌	五九	六三	一と一、一
頰及顎癌	一一	二〇	一と一、八
舌癌	四	一四	一と四、五

元

咽喉癌	四	五四	一と一三、五
甲状腺癌	五	二	一と〇、四
肺癌	七	二二	一と三、一
乳腺癌	一三二	三	一と〇、〇二三
合計	一一四〇	九一八	

即ち我國に於ては女子に絶對數少く、獨逸にありては之れに反して、女子に絶對數多し、これは如何なる關係に因るか、後日の研究に待つより仕方がない。

尙ほ序ながら、癌は他の病氣と比較してどの位あるかと云ふに、石橋、鷹津兩氏の統計によれば、總解屍數七四八五中癌腫は八一二例即ち一〇、八五%であつて、比較的大なる軟度のものである。今歐洲諸家の統計に見るに（癌第九年

三册）

元

ステインハウス(ブラツセル)	八、八七%
パデー	九、〇八%
リツフ (ミユンヘン)	九、六〇%
リツエンマン (ベルリン)	九、一三%
ダニエルゼン (キートル)	九、五二%
レツトリツフ (ベルリン)	一三、〇〇%
ヘルンヘルド (同)	一三、二四%
プロスト	八、〇〇%
ルバルフ	八、七〇%

尚ほ衛生局年報(大正四年)を見るに、大正二年度日本全国の死亡者總數は百〇二萬七千二百五十七人にして、其中癌死亡者總數三萬四千七百四十五人あつて約三十分の一の死亡がある。

第六章 他動物にも癌がある乎

動物にも癌がある。さて此の恐るべき癌は、人間のみに限るか、それとも他動物にもあるかと云ふに、動物にも澤山あれば、植物にもある、植物では葡萄の樹にもあれば林檎にもある。

動物には、人と全く同じきものが生る、犬、馬、豚、牛等の家畜には澤山ある、恐らくは猛獣にもあるであらうが、これは分らぬ。動物の癌では、口腔、生殖器癌が多い、殊に面白きは二十日鼠の年老つた牝に、乳癌の多いと云ふことである。

此の動物の癌發生に就ては、大阪醫科大學の佐多博士の面白き統計があるから、それを掲げよう(東京醫學會雜誌第十七卷第十五號)

動物諸臓器の癌發生の割合

動物にもある

臍 肝 腹 腸 胃 食 喉 齒 耳 臍 子 卵
 臟 臟 膜 道 頭 淋 巴 節 齦 下 腺 宮 巢

三 五 五 八 一 四 一 一 七 八 四

四 一 一 六 二 六 六

五

二 二〇 一 一 二 六 二 三

四 二 一

三

攝 畢 膀 腎 乳 陰 陰 肛 唇 眼 皮 臟 器
 護 丸 胱 臟 腺 門 莖 門 膚 種 族

一 三 四 二 八 一 五 八 四 一 二 馬

一 九 〇 一 一 二 一 二 二 牛

羊

一 〇 八 九 九 三 四 一 一 六 八 一 六 六 犬

五 一 一 六 六 貓

七 二 二 豚

痛は移植
し得

腸間膜腺	四	一	一	五	一
腹腔	一	一	一	一	一
鼻及副鼻腔	五二	二	一	一	一
咽頭	二				
喉頭	七	二	一		
肺臓	一三	三	一	一〇	三
胸膜	五	一		二	一
胸淋巴節	一			一	

茲に最も重要なことがある、それは痛を他の動物に植えると接くと云ふことである。これは十五六年以來重要視された問題であつたが、近年になつて、それが接くと云ふことが分つて、痛の研究上大に進歩しつゝある、それが爲めに其土塞、塞木と云ふべき二十日鼠は貴いものになつて來たのである。

移植の出來ると云ふことはどう云ふことであるかと云ふに、丁度接木と同じ理窟であつて、例へば梅の塞木に他の梅の小枝を接ぐと、それが發育すると同じこととて、或る動物(主として廿日鼠)を塞として、それに他の廿日鼠の痛組織を持つて來て植えると、其の塞になつた動物に、立派に痛が発生する、つまり接ぐのである。接くと云ふことは、結核菌を甲より取つて乙に植えると、乙も結核になる、それとは丸つきり意味の違つたものである、こは傳染であるが、痛の場合には移植である。従來移植は健康組織の間には行はれて居つた、例へば鼻を接ぐ耳を接ぐ、火傷の痕痕ひどい處に、他の健康なる皮膚を持つて來て接ぐと其處に立派な皮膚が出来る、所謂植皮術などがそれである、それが今度は痛を接ぐことに成功したのである、それが爲めに、痛の實驗的研究は、非常に進んで來たのである。

各國研究
の有様

第七章 治療はどうする乎

吳

日本の進
歩

今度は、痛腫の治療はどうするかと云ふに、前述の如く、家族に精神病の居るのであるから、誠に困るのである。それし其の本態を決めて、これを治療せんが爲めに、各國とも獨立したる研究機關を備へて居る、英國の如きは皇太子殿下が總裁となり、二百五十萬圓と云ふ巨額の費用を投じて研究して居る、其の他獨逸佛蘭西、北米合衆國でも同様であり、我が日本に於ても、先年來痛研究会なるものを設け、研究家を助け、有名なる學者に仕事を囑託し、また機關雜誌として、痛を出して居る。斯くの如く各國とも、各特別なる機關を有して研究して居るので、其の研究も餘程進んで居るが、我が日本國に於ける研究の業績は、何處にも負けて居らぬ、外國で出来ぬものが二つ三つある位である。例へば山極、市川兩氏の研究になつた、兎の耳に「テール」を長く塗つて、とう／＼痛を人工

成功の時
を待つ

的に發生せしむることに成功したなどは、實際世界的の仕事である、これまで人工的に痛を發生せしむることを企てた人は、幾らもあつたが、一人として成功したものが無かつたが、我が山極博士等によつて、成功したので、全く我が國學界の名譽である。

それで今は痛の本態を決めて―大體決りつゝある―細胞の生物學的の性質を決めて、どうすれば痛細胞のみを殺すことが出来るか、つまり健康組織を害することなしに、痛細胞のみを殺して、痛を治癒せしむることが出来るかと云ふことに就て、世界中の學者は熱心に研究し、何時か必ず成功する時の來るのを希望を持つて居る。

治療の方
法

痛の治療法として、血清療法、ラザウム療法、X光線療法、或は化學的療法とか、種々の療法があつて、此の四五年来の報告によれば、此等の療法によつて治療が出来るとか出来ぬとか種々の報告があるが、此等の研究は、前述せる二

前驅症の根治

十日鼠の痛によつて、勝手に出来るのである。そして、此等の療法の中のあるものは、鼠の痛には效がある、人の痛にも利くことがあるも、要するに今迄の方法では、未だ根治するといふところまでは進んで居らぬ、それで別の方面に改良を企てつゝある次第である。

第八章 豫防は出来ぬか

痛は豫防することが出来るか、どうかと云ふに、痛のたれがあれば、到底豫防することは出来ぬ。併し痛の前驅症、即ち前に述べた胃痛の前驅症たる胃潰瘍の如きを、完全に早く癒すと云ふこと、一面に於て、癌發生の豫防となるものである、此の事は全く世人は注意して居らぬやうであるが、是非奇麗に根治するの必要がある。前に述べてある前驅症と見るべきものに罹つたときには、完全に癒る迄、醫治を受けなければならぬ、前驅症を完全に癒すと云ふことは、

豫防上非常に意味のあることである。

痛は刀の届くところ、即ち完全なる外科手術を施し得るところは、未だ癒る場合もあるも、他は先づ殆んど仕方がないと云ふものである。併し前驅症の根治が出来れば、比較的痛に罹るものが少くなるわけで、此の事は非常に大事なことであるから、俗人も之れを知つて置くの必要あると同時に醫師も充分注意しなければならぬことである。

よく痛を癒す薬は無いかと聞かれるが、本態が分らずに癒るわけではない、キニネの如き薬即ちマラリヤの特効薬にキニネがあるが、斯様のもものは殆んど行きつまつてしまつた、どうしても頭腦で練り上げて、確實なる基礎の上に根本的の方針を立てなければならぬものであつて、痛も矢張り其の本態を決め、根本的の方針が定まつた上でなければ、確實なる治療法の發見と云ふ段取りとなるのである。獨逸の學問の進むのはそれと同じく、何事も根本より決めてかゝつて居るか

根治法少し

根本的の方針を定め

らである、日本の人は、唯いきなり癌に薬は無いかと聞くが、これは其の頭腦の非科學的なるを證明して居るのである、此の場合には、癌の本態は何であるかと聞くべきものであつて、癒るかと思ふべきものではない、癌の本態は何である、それではどうして癒すかと云ふ風に秩序ある思想を養成するの必要がある、殊に若き人にあつては尙ほ更此秩序的思想の養成が必要、緊切である、これは獨り醫學にのみ限つたことではない、總てのものに向つて、此思想の養成が必要である。

人體に於ける細胞は何十種と云ふ多數であつて、胃、表皮、筋、血管、神經、結締織等は皆特別の細胞より成り其の他總て各々相異つて細胞の集合體である、そして各々相異つて作業天分を持つて居るので、何れも中よく融合して居る、胃本位でも無ければ、また腸本位でも無く、此等の總てを支配するのは神經であつて、神經の支配によつて各其本分を守りつゝあるのである。然るに癌細胞は是等のものとは異つて、癌本位、自己本位であつて、自分だけ肥ればよい、自分だけ蕃殖すれば他はどうでもかまはぬと云ふのであるから、假へば胃に發生すれば胃のことは少しも顧慮せず、胃を荒らし、遂には其の人を損ふに達するものであつて、實に恐むべく、また恐るべきものである。

第九章 癌は殖えるか否乎

癌は益々殖えて來るか、どうかと云ふに、どうも充分のことは分らぬが、西洋の統計では殖えるやうになつて居るか、日本ではどうか分らぬ、併し殖えると云ふ徴候も無いやうである。

癌の多寡は國によるもので、一般に野蠻人に少く、歐洲人に多い、東洋では支那に多く、殊に香港あたりは多い、濠州には少いと云ふことである。

癌はまた職業に關係のあるもので、嗜好としては酒、煙草を嗜むものに多く、

文明人に多し

統計的觀察

西洋では煙突掃除人、アニン色素の職工、パラファンを扱ふものに痛が多い。痛の前驅症となるべき疾病を起すものは、野蠻人よりは文明人に多い、だからして痛もまた文明人に多いわけである。それと同時に世が文明に進むに従つて、痛が多くなるわけであるから、減ると云ふ人は無い。國としては瑞西や瑞典に多いと云ふことである。また痛は何れの階級にもあるもので、上流でも中流でも將たまた下流でも起り得るものである。痛の殖えるか否かに就て確實の統計は無いが、石橋、鷹津兩氏の痛の統計的研究（第九年第三冊中にある統計）は、此の問題の解決に参考となるを以て、左にこれを掲載す。

年次	總解屍數	痛解屍數	同上比較%
一九九六	二二七	八	三、三八
一九九七	一八七	一六	八、七〇
一九九八	二一三	一一	五、六五
一九九九	二八〇	二九	一〇、三五
一九〇〇	四一一	三五	八、五二
一九〇一	四二五	四五	一〇、六〇
一九〇二	四五五	五一	一一、二〇
一九〇三	三九四	五〇	一二、七〇
一九〇四	四二六	五一	一一、九五
一九〇五	三八五	五一	一三、二五
一九〇六	四二〇	四六	一〇、八〇
一九〇七	三六一	五四	一五、一〇

一九〇八	四三二	五一	一一、八〇
一九〇九	五〇三	五一	一〇、一四
一九一〇	三五五	五八	一六、三〇
一九一一	三〇二	四六	一五、二七
一九一二	四五五	六〇	一一、〇〇
一九一三	四八六	三九	八、〇一
一九一四	五〇〇	五三	一〇、六〇
合計	七四八五	八一二	一〇、八五

此の表によれば、痛の減ると云ふことよりも寧ろ殖えて來たと云ふ事が穩當であらうと思はれる。

第十章 何故痛を恐るゝ乎

人は非常に痛を恐れて居る、何故痛を恐るゝか、つまり痛の診斷を受ければ死刑の宣告を受けたと同じであるからして、それで恐るゝのである。併しながら痛以外に、手の付けやうの無き疾病はいくらもある、だからして、痛を恐るゝ前に之を防ぐことが必要である。

痛を恐るゝ前に、先づ前驅症を恐れなければならぬ、前驅症其ものは恐ろしく無きも、それが痛になると恐ろしきものになるから、注意すべきもので、總て病は輕き中に早く癒すことが大切である。尤も前驅症があつても、必ず痛に罹るとは限らぬが、併し前驅症あれば比較的痛を起し易いから注意が肝腎である。

我が日本人の研究能力は、他國人に比して劣つて居るとは思はぬ、併し今は模倣時代は既に過去となつて、獨立研究の時代であるが、其のやり様によつては、歐米人士の先頭に立つことが出来る、既に痛の研究に於ける、我が日本人は世界的の研究を爲し遂げて居るのである。さればすべての人が、前申す如く根本的に

豫防が必
要

前驅を恐
れよ

根本的の
理解

胃痛は最も多い

理解する力を持つことが必要であつて、これは痛治療上のみならず、總てに向つて爲すべきことであつて、吾人は痛を恐れず、まだ安心もせず、研究し治療すべきである。

第十一章 胃癌

胃癌とは、胃に生ずる痛と云ふ一種の新生物である、新生物とは、疾病中の一大分類中の一つであつて、松や杉に生ずる「こぶ」や、唐もろこしに生ずる、俗に「おぼけ」と云ふものに相當するもので、身體を組み立て、居る組織の一部が不調和に増大するものである。此の腫瘍の中には比較的性質の良いものと、悪いものとある、俗に「たんこぶ」と稱し、背に大きな巾着のやうに垂れ下つたものを持つて居る人があるが、彼らは良性の腫瘍に屬すべきものである。痛は最も悪性のもので、名からして痛などと妙な名であるが、其の外観岩石

原因

の聲々として隆起して居るやうなもので此の名を附けたのである。勿論此中にも色々の種類があつて、その外形等は種々である。兎に角此の痛は上皮細胞のある處は何れにも生ずるもので、従つて、胃、舌、食道、子宮、卵巢、乳腺、肺喉頭、肝臓、腎臓、皮膚等方々に生ずるものであるが、胃には最も多いもので、總ての痛を合したるもの、凡そ三分の一を占めて居る、尙ほ統計を嚴にしたならば、一層多いかも知れぬ。

癌の原因に就ては、前に詳しく述べてあるが、或る人は一種の黴菌、または寄生蟲によると云ふ人があるが、此等の説は現今甚だ勢力を失ふて居る。また化学的或は器械的刺戟が此の原因を爲すと云ふ説もある（山極博士等が兎の耳にテールを塗つた、即ち刺戟によつて癌を發生せしめたのは前に述べた通りである）胃で云ふと、胃潰瘍と云ふて、胃の内面が潰れるやうな病氣があるが、よく此の後に痛を生ずることがある、其の他經驗上辛い物、胡椒、濃い茶などの刺戟性のも

外因と内因

のを多く嗜む人、酒を多く飲む人に多いように云はれて居るが、元來痛に罹る素因を持つて居る人が、此等のものを嗜むのであるか、否やは定むることが出来ぬ、果して食物にのみよるものとすれば、印度のやうに辛い物を甚だ多く食する國には甚だ胃痛が多い筈だが、果して如何であるか。
多くの疾病には外因と内因とあるもので、以上述べたのは總て外因であるが胃痛には内因も甚だ重きをなして居るやうに思はれる、即ち胃痛には屢々遺傳なるものを認むる、或る學者は、一家族中に三代の間に十六人の痛腫患者を見出したと云ふことである。痛が血統を引くと云ふ事は、ナホレオン以來(前掲)著名になつたのであるが、痛に罹つて居る人に就き、その家族または親族を調ぶるに屢々同じ痛を憂いた人があるを聞く、何れ痛に罹る人は、已に多少これに罹り易い傾向を持つて居るものであらう。
年齢は他の痛と同じく、元來四十才以上の人に多いものであるが、時として

解剖的の變化

發生する部位

は三十歳または二十歳代の人にも來るものである。胃痛はまた始終胃病で苦んで居ると云ふ人にも來るが、また今まで甚だ胃が丈夫だつたと云ふ人に來ることも多いものである。
同じ胃痛の中にも、性質の比較的良いものと、悪いものとある。比較的性質の良いものは、痛が胃の内面に隆起することが少くして、割合に硬く、主もに胃壁を侵し、胃の壁が厚くなるのである、これはその経過も長く診斷も六つかしいものである。悪性のもは痛が疊々として、胃の内面に隆起し、比較的軟かで、病氣は早く増悪する。此の外膠様痛など、唱えらるるものがある、其の外形は膠のやうな數多の塊りで、これが速かに成長し、胃の大部分に擴がるもので、これは最も性質の悪いものである。
痛腫の發生する場所は、胃中何れの處を撰ばぬが、レーベルト氏の調査によると左の通りである。

部位と経過の關係

幽門	五	一	プロセント
噴門	九	〃	
後壁	四	〃	
大彎	三	〃	
小彎	一六	〃	
前壁	四	〃	
前及び後壁	四	〃	
汎發性浸潤	六	〃	

胃癌の生ずる場所は、疾病の経過に甚だ關係あるものであつて、前壁、後壁にあるものは、始めの内は大した障害がないけれども、胃の入口にあるものは、食道より食物が胃の中に入るのを防げ、遂には食物が通らなくなる。胃の出口にあるものは、胃の中に入ったものが腸に出て難く、食べたものが、すぐ吐き出

経過

轉移

早期診断の必要

されるやうになり、出口が狭くなる爲め、胃の中に食物が滞留し、胃が擴張したり、又は同時に胃が下に垂れたりするやうになる。

以上の痛は、次第に成長して、胃の大部分を侵し、始まりから一二年の後に遂に衰弱の爲めに倒れる。或は胃の壁が癌の爲めに次第に侵され、自ら穴が出来て急性腹膜炎など、云ふ病を起して、急に死することもある。また癌には轉移と云ふことがある、これは或る場所に癌があると、血管とか淋巴管など云ふものによりて、癌の一部分が他に運ばれ、此處に更に癌が成長する、所謂癌の分店と云ふべきものである。此の轉移は胃痛の際には淋巴腺及び肝臓に見ることが最も多い、殊に肝臓の轉移は著しく大きくなるものがあつて、本店たる胃痛の方が左程大ならざるに、支店たる肝臓癌の方が著しく大きくなることもある、斯くの如き際には、胃痛には少しも氣附かず、肝臓癌と診断されるものが多い。茲に胃痛の際には、如何なる容態で、如何にして、其の診断を下し得るかを述

初期の徴候

べようと思ふ。胃癌は嘗つては全く不治の病と考へられて居つた。併し近來になつて、外科的手術によつて、多少治り得ることが知られた、但し此の手術は、その初期にのみ有効のものであつて、末期には効果を収め難い、故に胃癌の治療上には早期の診断が甚だ必要である。

胃癌の始めには、食が進まず、食べたもので消化が悪しく、始終胃の邊に壓し附けらるゝやうな感じ、或は劇しい痛みがあり、胸が灼け、或は屢々蟲づが出たり、或は嘔吐がある、此の吐くものは初期には食物のみであるが、末期には煤のやうなものが澤山混じて来る、これは胃癌のあつた場所に出血し、その血が古くなり、黒色に變じたもので、これが癌の腐れたものと一緒に固まつて出て来るのである。或は新しい血も出て来ることもあるが、胃癌の患者には、初期には左程でもないが、末期になると、消耗と云ふて、甚だ見そはらしく瘦せる、一體癌は何處に出来ても身體が消耗するものであるが、胃の癌には一層これが甚し

胃部の結節

い、これ一つには、身體の營養物を攝取すべき臓器が侵される爲めである。胃痛の際には段々衰弱して来るものであるが、稀れには一時少し營養を恢復しかゝるやうなことがある、併しこれはほんの一時のことである。

其の他胃痛の徴候には、いろいろ雑多のものであるけれども、此處には、其の主要なるものを尙ほ少しく説明すれば、

胃部に結節を觸れる事、これは胃に生じた癌腫を直接外より觸れるので、何より確なものであるが、なかゝ何時もさう旨くは行かぬ、第一前述の如く胃痛には色々の種類があつて、どれも結節を作ると限らず、或るものは唯胃壁が厚くなるのみのものもある。斯くの如きは、結節を觸ることにより、胃癌の診断を下すことが出来ぬ、次に又假令結節を作るにしても、胃の後壁とか入口にあるものでは、中々外より觸れ難い。

そして一般に、此の腫れ物を外より觸れて診断の附くやうになつたのは、既に

作用の減弱

餘程進んだもので、出来るだけ早期診断を要すると云ふ療法にはもう間に合はぬ（腹部に固き結節が觸れるからとて、必ずしも總て直ちに胃痛とは云ひ難い、他にも色々の疾病で、結節物として觸れるものがある、此等の確實なる診断はいろ／＼あるが、X光線の診断を受くるなどは、確實なる方法の一つであつて、可なり初期にも診断し得るものである、尙ほX光線は痛の治療にも應用するものであるが、其の詳しきことは、本叢書中の理學的療法の話によつて知られたい）胃の働きの減弱する事 胃は食物を攝取し、其の壁より必要な液を分泌し、胃が自ら内容物を揉みこなすやうな運動をなし、後之れを腸管中に送り出すものであるが、胃壁の痛の爲めに厚くなり、硬張つたり、又は胃壁に、結節を生じたりすると、以上の働きの妨げらるゝ、また此の消化作用が妨げられたりすると、その結果胃の加答兒を起して、一層消化が悪くなるものである。

此等は殊に、胃の出口に痛のあるときは、一層甚しいものであるが、此の胃の

胃液の變化

働きの悪しくなるときは、必ずしも胃痛のみに限らず、普通の慢性胃加答兒、胃擴張、胃下垂症、胃アトニー症など、云ふ病にもあるので、必ずしも、これのみで胃痛の診断を下すことは出来ぬ。

胃液の變化すること 胃の消化液に關しては、胃痛があるときは、鹽酸及びペプシンなる消化に必要な液を作り出すことが減弱又は消滅し、乳酸など常に始んど無い物を拆出する、嘗つては消化液の此等の變化は胃痛に必要なものと信じ、胃液検査一點張りて、胃痛の診断を下さうとした、併しいろ／＼研究の結果、胃液の變化は必ずしも何時も當になるものでないと云ふことになつた、第一胃痛の際には鹽酸が甚だ減少すると云ふけれども、時としては減少しないことがある、即ち胃痛殊に胃潰瘍の後に生ずるものに於ては、少くとも初期には胃酸過多症と云ふて、鹽酸が甚だ多いことがある、斯くの如き際には、假令胃痛を發生したところ、鹽酸の量は少くないのみか、反つて普通のものより多い（尤も末

確かな診
断法

期には多少減少するけれども、又以上の胃液の變化は、必ずしも胃痛のみに限るものでなくして、慢性の胃加答兒、胃擴張などの際にも見るものであつて、胃液の變化は診断上有力の参考にはなるけれども、直ちに之れのみを以て診断することは出来ぬ。

胃痛には始めより前述の如き色々の症候が揃ふて居るものもあるが、或るものは末期でなければどうしても確かの證が無いものもある、或るものは死ぬ迄殆んど胃痛と云ふことがわからず、解剖によりて始めて之を知ることがある、或は胃潰瘍があつて、其の後に頑固な胃病があり、薬を飲んでもなかく治らぬ時、又は今まで其だ胃が丈夫であつた人が、特別の原因が無くして、急に胃病を起し、どうしても治らぬ時は、胃痛の疑を措いてもよい。或は胃痛はある時までは、殆んど何んとも無かつたものが、一寸した食べ物により、急に色々の症状を起すこととあるが、胃痛の最も確かなる診断法は、腹を切り開いて胃を調べることであ

療法的療
法

る、此の時、胃痛があつたら、其の場で直ぐ手術を行ふことが出来る。要するに胃痛の早期診断と云ふものは、至つてむづかしいもので、之れを確めらる時は、既に余程進んで居る時が多い。

痛の治療法の一般に就ては、既に記述せるが、尙ほ少しく述べんに、從來胃痛の根治的療法なるものは、殆んど不可能のものとなつて居つた、而して凡て姑息的の治療法のみで甘んじて居つた、胃痛のときは食欲が減少するので、いろいろの健胃剤がある、併し此の薬の名稱は茲に一々擧げる必要もない。

また屢々胃の痛みの甚しいもので、患者の唯一の苦悶であることがあるが、これにもいろいろの薬がある、其他各種の症候に對する種々の薬がある、併し此等の薬は僅かに症候を減ずるのみで、絶體的にその原病を治し得るやうな薬は未だ知られて居らぬ。以前白屈菜なるものが胃痛特效の薬のやうなことを云ひ振らされたが、多少疼痛を減ずるやうなことはあれど、全く胃痛そのものを治する

死の宣告

外科的療法

痛の除去
と生命の
關係

早期に手
術が必要

效は無い。胃の中に食物等が滞つて苦しいときは、胃を洗滌して、一時氣持がよくなることがある、併し勿論之れによりて決して癒るものでない。

茲に於て、一旦胃痛に罹かゝつたが最後、薬を浴びるほど飲んでも、いくら滋養物を多く食つても、もう助かる見込は無い、胃痛の診断は取りも直さず死の宣告となる、併し尙ほ暗黒の裡にも多少一縷の光明が残つて居る、即ち胃痛は必ずしも全く助かる見込がないと決つたものでない、然らば如何にすればよいか、これには患者の大決心が唯一の治療法である。

今より凡そ四十年前獨逸のビルロートが、胃痛を外科的に治療して好成績を得た、これは當時大に世を驚がしたが、其後多數の人々が外科的の手術により好結果を得た、然して今日に於いては、胃痛の根本的治療としては唯外科的の手術あるのみとなつた。

此の外科的の手術とはどうするものであるかと云ふと、胃の悪い部分を切り

去るのである、痛が未だ著しく大ならざるときは、胃の一部分を切り去るのみで良いが、大なるときは胃の全部を取り去ることもある。胃が全く無くなつたら、生きては居られまいと思ふ人もあるだろうが、元來胃なるものは、左程生命に關係あるものではない、實際食物は胃の中で多少消化さるゝも、唯其の小部分のみで云はゞ消化の準備をなすもので、消化に最と必要な場所は腸管である、故に胃が全く無くなつても、これが爲めに直接死ぬことはない。動物實驗上、動物の胃を切り去つても、その動物は死なずに長く生存して居る、そして腸の上の方が少し膨れて胃のやうになることである、故に外科治療の爲めに、胃を全部或は一部切り去ることは、直接生命には影響せぬものである。

かう云ふて來ると、胃痛はどんなものでも、切つて治療してもらへば癒るやうに思はれるが、なかゝさうは行かぬ、これには甚だその時機が必要である。外科的の治療は、胃痛の初期にのみ有効であつて、末期には殆んど奏效しない、こ

れは痛が諸方に擴がつて、なか／＼取り去ることが困難である。また轉移と云ふて、方々に胃痛の支店のやうなものがあるので、胃の方は取り去ることが出来ても、他のものは取り去ることは出来ぬ、故に胃痛を完全に治療せんとせば、須らく出来るだけ、初期に胃痛の診断を下し得なければならぬ。ところが胃痛の初期は前述せる如く甚だ困難なものであつて、末期でなければ判らぬものが可なり多い、また假令初期に診断されても、その患者はなか／＼思ひ切つて外科的の治療を受ける氣にならぬ。獨逸あたりでは、あまり外科の手術を恐れぬさうであるが、我が國に於ては、甚だ刀を嫌ふ傾向がある、殊に田舎の開けぬ人に多い、中には腹を割いて療治さるゝ位なら寧ろ死んだ方がよいなど云ふ人がある。早く断然思ひ切つて手術して貰ひさへすれば、充分癒るべきものを、みす／＼死の府に赴かしめることがある。又同じく手術を受けるにしても、初期の内は左程苦痛を感じぬ爲め、いくら胃痛と云ふておどかさされても、直ぐ手術して貰ふと云ふ氣

七〇

一縷の光

X光線療法

にはならぬ、多くは痛みが堪へ難くなるとか、或は段々衰弱するとか、腹に大きな氣味の悪い結節などが觸れるやうになり、いくら薬を飲んでも癒らん、仕方がない、切つて見てもらうかなど、始めて手術を受けることとなる、併し奈何せん此の時は已に萬事休すの時である。要するに胃痛は不治の病である、これに罹つたら最後生命は多くとも一年有半と悟らねばならぬ、但し尙ほ一縷の光明あり、即ち外科的の早期手術にして、これには早く断然思ひ切ると云ふことが最も必要である。仕方が無くなつてから、切つて貰つて癒らなかつたと云ふのは、それは無理な話である。

近時X光線療法が效があると云はれて居る、假令全治に至らぬまでも、疼痛を緩解し、腫瘍を小さくし、貧血を去り、營養状態を恢復し、生命を長からしむるものである。

第十二章 子宮癌

子宮癌は
多し

子宮癌もまた癌腫中多きものであつて、男子には胃癌、女子には子宮癌が著明である。佐藤勤也博士が一般癌患者一千三百七十二人に就て統計したるものを見るに、子宮癌四百六十人即ち三十三、五プロセント(實用婦人科學等十二版による)となつて居るから、先づ子宮癌は其の三分の一を占めて居るものと見て差支が無いわけである。

癌の原因に就ては、刺戟説が其多きを占めて居る、子宮癌もまた其の例に洩れないで、分娩或は交接に際して最も刺戟の多い子宮口に多く發生するものであり、尙ほまた分娩の回数と密接なる關係を有するものであつて、子宮癌は同じ既婚者の中でも子供の多い、即ちお産を度々した人に多いのであるが、これに反して未婚者の子宮癌は少い、此等の關係もまた産の爲めの刺戟と見ることが出来るのである。

原因

年齢の關係

子宮癌の發生する年齢は、他の癌と同様四十歳以上のものに多い、近江ドットルが大正五年中診断せる婦人科の患者三千人中、百三十一名の子宮癌患者を診断した、そしてその癌患者は平均六人位の子を産んで居る、其の年齢の如きも二十代などには極めて稀れで、四十、五十代は最も多數を占めて居る、次表によればそれが明かである。(衛生新報第百八十九號)

二五——三〇年	四人
三一——三五年	一六人
三六——四〇年	三一人
四一——四五年	二四人
四六——五〇年	二〇人
五一——五五年	一五人

症候
三徴候

五六——六〇年 七人
六一——六五年 一二人
七三年 一人
八二年 一人

要するに子宮癌は多く月經の閉止して、生殖作用が停止して、總ての生殖器が萎縮するときに多い。月經閉止時期の攝生の大切であるは、此關係でも分る。同じく癌と云ふても、病理學上から云へば種類があり、また子宮癌と云ふても臨床上には腔部癌、頸部癌、體部癌と分けなければならぬが、其れは専門家のすること、普通には唯子宮癌一般の症候が判れば宜しいのである。

さて子宮癌に罹ればどう云ふ風になるかと云ふに、主なる徴候は、出血、白帶下、疼痛の三つである。尤も此の三つは必ずしも初期からあると限つたとはない、また三つとも揃つて來ると云ふわけでは無いが、兎に角初徴として外面に現

出血

はるいは此三つである、それが多くは交接のあとで出血があると云ふのは最も注意を要するものである。また少しの痛みも無く、また白帶下も無く、患者本人は頗る達者で居るのに、フと少量の子宮出血を見ることがあるとか、或は別に子宮出血と云ふで無く、月經が常より長くかゝつて、其の間の血量は少しく増加することだけなのがある。即ちこれまで三日とか四日とかあつた月經が延びて六日となり八日となり、月經の終つた日の血量も、初めに來た日と同じやうな風のものもあつて、時としては、此の月經過多の爲めに貧血の症狀を呈して眩暈を來すこともある、併し此の出血の外には、他に少しも身體に異常が無いから打捨て置くこと云ふこともある。また月經閉止後に出血があることもあるが、多くの人はまた月經が來た位で少しも意に介しない、實際月經閉止期になると、假令何等の病氣の無い人であつても、經血が不規則になつて來るから、癌の爲めに起つた出血までも、生理的のものと思ふて、安心して居ることが多い、それが爲めに機會

白帶下

疼痛

経過

を失して、可惜一命を失ふに至ることが、世間によくある例であるから、若し四十歳以上の婦人であつて、疑はしき出血、不規則なる經血があつた場合には、打捨て置かずに、一日片時も早く専門家の診察を求めねばならぬ。

出血がだんく増して來るに従つて、白帶下を増して來る、そして其の間には赤色を帯びる様になつて、丁度肉汁の様になつて、臭氣甚だしく、腐つた肉のやうな匂ひがする。

痛みは一樣では無い、全く無いものも稀にはあるが、多くは始め骨盤の深部に、時々軽い針で刺す様な痛みがあり、それが段々強くなつて、刺すやうな、穿つやうな耐えられない痛みがある。其の痛みが増すに従つて、患者は日夜病床に呻吟し、食慾も無くなり、營養は益々害せられ、顔面蒼白となり、眼凹み、鼻高く、全身瘦せ衰へ、所謂痛腫性惡液となつて、まるで生きた觸癩の様になるが、精神は其の割合に侵されぬから、其の痛々しさ加減は、全く見て居られぬやうになるものである。

痛腫に罹つてから、死ぬ迄の間は、短きは九週日、長きは十一年に亘る報告もあるが、先づ大抵は一年か一年半位のものである。

子宮癌の療法は、従來述べ來つた通りのものに過ぎぬ、目下のところ確實の方法としては、極めて早期に診断し、早期に切除手術を行ふと云ふより外に無いが、これとも百發百中とは行かぬものである。

今より十數年前のことであるが、獨逸の或る婦人科學會にて、子宮癌患者の不幸を救はんが爲めに、注意書を通俗に、新聞紙上に記載して公衆に指示したことがあり、今参考の爲めに、其の全文を左に掲載しよう。

- 一、子宮癌は痛みも無く、又他の症状も無く始まります。
- 二、子宮癌の最初の徴候は、子宮出血及び白帶下でありますが、其の出血は或は月經過剰として、或は月經時以外の不時の出血として、或は月經閉止期

獨逸婦人科學會の注意書

療法

出血として又は、月經閉止後の月經復歸として來ります。

六

三、子宮癌は唯手術によりてのみ治療し得るものでありまして、しかも其の手術は最も初期に於てのみ行はるゝものであります。子宮癌は手術を施さずには決して癒りません。

四、子宮癌は、捨て置けば、必ず悲惨なる死を遂ぐものであります。

五、子宮癌患者が救はるゝには、子宮出血及び白帶下が（殊に四十歳以上の婦人にありて）ありましたならば、何の顧慮するところ無く、醫師の忠告に従はねばなりません。一時間毎に危険を増すものであります。

六、故に命の惜しい人は、少しでも疑はしい現象がありましたら、何も云はずに醫者の所に御出なさい、一時間たりとも後れてはなりません、此の悪魔を退治するのは唯醫者の刀のみであります。

大正六年八月七日發行

正價金拾五錢

編纂者 衛生新報社編輯局 伊藤 尚賢

發行者 東京市京橋區出雲町一番地 野村 鈴助

印刷者 東京市本所區香場町四番地 守岡 功

印刷所 東京市本所區香場町四番地 凸版印刷株式會社本所分工場

發行元

東京銀座
大通新橋際

新橋堂書店

電話新橋一九九一番
振替東京二〇〇番

醫學博士 廣川和一郎先生述	◎淋病の話	定價金拾五錢
佐藤病院長 佐藤長祐先生述	◎梅毒の話	定價金拾五錢
東洋肛門病院長 森直郷先生述	◎肛門病の話	定價金拾五錢
醫學士 杉江 黄先生述	◎ヒステリーの話	定價金貳拾五錢
醫學博士 南 大曹先生述	◎胃腸病の話	定價金貳拾五錢
醫學士 森 繁吉先生述	◎病人看護の話	定價金貳拾五錢
岡崎醫院長 岡崎桂一郎先生述	◎有益な食物と危険な食物の話 附食合せの話	定價金拾五錢
醫學士 中村 讓先生述	◎精神病の話	定價金貳拾五錢

醫學士 菊池 林作先生述	◎脚氣ミリョーマチスの話	定價金拾五錢
下クトル 齋藤精一郎先生述	◎寄生蟲病の話	定價金拾五錢
醫學博士 豐福 環先生述	◎小兒傳染病の話 卷上	定價金拾五錢
醫學博士 豐福 環先生述	◎小兒傳染病の話 卷下	定價金拾五錢
下クトル 竹中繁次郎先生述	◎感冒と肋膜炎の話	定價金拾五錢
醫學博士 阿久津三郎先生述	◎男子生殖器病の話	定價金拾五錢
醫學士 高橋 政秀先生述	◎妊娠と避妊の話	定價金拾五錢
醫學士 森 有道先生述	◎良薬と毒薬の話	定價金拾五錢

醫學博士 杉本 東藏先生述	◎便秘と下痢の話	定價金拾五錢
醫學博士 中原徳太郎先生述	◎外科療法の話	定價金拾五錢
醫學士 森 繁吉先生述	◎注射の話	定價金拾五錢
醫學士 井上 温先生述	◎眼病の話	定價金拾五錢
醫學士 森 有道先生述	◎呼吸器病の話	定價金拾五錢
ドクトル 竹中繁次郎先生述	◎性慾教育の講話	定價金拾五錢
ドクトル 落合 惣三先生述	◎科學的美容法の話	定價金拾五錢
醫學博士 額田 豐先生述	◎腎臓病と糖尿病の話	定價金拾五錢

四

醫學博士 土田卯三郎先生述	◎腦病の話上	定價金拾五錢
醫學博士 土田卯三郎先生述	◎腦病の話中	定價金拾五錢
醫學博士 土田卯三郎先生述	◎腦病の話下	定價金拾五錢
岡崎醫院長 岡崎桂一郎先生述	◎有効和漢藥療法の話	定價金拾五錢
ドクトル 竹中繁次郎先生述	◎肺病有効療法の話	定價金拾五錢
衛生新報社編纂	◎化學的健康増進法の話	定價金拾五錢
衛生新報社編纂	◎物理的健康増進法の話	定價金拾五錢
衛生新報社編纂	◎滋養食物と滋養劑の話	定價金拾五錢

五

衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂
◎九種傳染病の話	◎癌の話	◎營養療法の話	◎生殖衛生の話	◎微生物と消毒の話	◎婦人健康増進法の話	◎兒童健康増進法の話	◎精神的健康増進法の話
定價金拾五錢 郵税金貳錢	定價金拾五錢 郵税金貳錢	定價金拾五錢 郵税金貳錢	定價金拾五錢 郵税金貳錢	定價金拾五錢 郵税金貳錢	定價金拾五錢 郵税金貳錢	定價金拾五錢 郵税金貳錢	定價金拾五錢 郵税金貳錢

六

衛生新報社編纂	醫學士 小川三郎先生述	醫學博士 橫手千之助先生述	□體力養成叢書□			醫學博士 大澤謙三先生述	醫學博士 二木謙二先生述	醫學博士 栗本東明先生述	醫學士 櫻田十次郎先生述
◎理學的療法の話	◎心臓病の話	◎理想的飲食物の話				◎冷水浴と冷水摩擦	◎腹式呼吸	◎海水浴	◎滋養物の攝取
定價金拾五錢 郵税金貳錢	定價金拾五錢 郵税金貳錢	定價金拾五錢 郵税金貳錢				定價金貳拾錢 郵税金四錢	定價金貳拾五錢 郵税金四錢	定價金貳拾五錢 郵税金四錢	定價金六拾錢 郵税金六錢

七

醫學博士 遠山 椿吉先生述
 衛生新報主筆 伊藤 尙賢先生述
 ◎ 呼吸靜座法
 定價金貳拾五錢
 郵税金四錢

□ 一般衛生書類 □

狩野病院長 狩野 謙吾先生著
 ◎ 訂正補神經衰弱豫防法
 定價金六拾錢
 郵税金六錢

狩野病院長 狩野 謙吾先生著
 ◎ 神經衰弱自療法
 定價金六拾錢
 郵税金六錢

村井 弦齋先生著
 ◎ 著者 痔疾の根治療法
 定價金八拾錢
 郵税金八錢

伊藤 尙賢先生著
 ◎ 實驗 民間療法
 定價金八錢
 郵税金八錢

醫學博士 瀨川 昌善先生述
 ◎ 病兒及虛弱兒の養育法
 定價金八拾錢
 郵税金八錢

□ 文學書類 □

高濱 虛子著
 ◎ 小説 尊主義
 定價金壹圓拾錢
 郵税金拾貳錢

黒岩 周六著
 ◎ 人 尊主義
 定價金五拾五錢
 郵税金六錢

本國 巖谷 小波 夫人著
 ◎ 家庭 小公子
 定價金七拾五錢
 郵税金六錢

長 田 幹 彦 著
 ◎ 自殺者の手記
 定價金六拾錢
 郵税金六錢

中村 春 雨 作
 ◎ 新劇 牧師の家
 定價金八錢
 郵税金八錢

村井 弦齋 選評
 ◎ 樹上下吟誦の友
 定價金八拾錢
 郵税金八錢

蘆花 徳富 健次郎 著
 ◎ 四六 みづのたはこ
 定價金壹圓拾錢
 郵税金拾六錢

蘆花 徳富健次郎著	◎刷み、ずのたはここ	定價金壹 郵税金拾貳錢圓
蘆花 徳富健次郎著	◎ <small>ポイント 改</small> 刷み、ずのたはここ	定價金壹圓 郵税金八錢
蘆花 徳富健次郎著	◎小説黒い眼と茶色の目	定價金壹圓 郵税金拾貳錢
肉弾著者 櫻井忠温著	◎十字路	定價金壹圓 郵税金拾貳錢
アトスミス著	◎文英フロム、マイ、ダイヤリー	定價金壹 郵税金八錢圓
アトスミス著	◎日記から	定價金八拾 郵税金八錢錢

□内外美辭名句叢書□

賣文社編輯局編纂	◎夏目漱石	定價金拾 郵税金貳錢錢
賣文社編輯局編纂	◎尾崎紅葉	定價金拾 郵税金貳錢錢
賣文社編輯局編纂	◎高山樗牛	定價金拾 郵税金貳錢錢
賣文社編輯局編纂	◎三宅雪嶺	定價金拾 郵税金貳錢錢
賣文社編輯局編纂	◎徳富蘇峰	定價金拾 郵税金貳錢錢
賣文社編輯局編纂	◎森鷗外	定價金拾 郵税金貳錢錢
賣文社編輯局編纂	◎トルストイ	定價金拾 郵税金貳錢錢

賣文社編輯局編纂	◎ニ	イ	チ	エ	定價金拾八錢					
賣文社編輯局編纂	◎ゲ	ー	テ	テ	定價金拾八錢					
賣文社編輯局編纂	◎イ	ブ	セ	ン	定價金拾八錢					
賣文社編輯局編纂	◎ツ	ル	ゲ	ー	子	定價金拾八錢				
賣文社編輯局編纂	◎ド	ス	ト	イ	エ	フ	ス	キ	ー	定價金拾八錢
賣文社編輯局編纂	◎曲	亭	馬	琴	定價金拾八錢					
賣文社編輯局編纂	◎德	富	蘆	花	定價金拾八錢					
賣文社編輯局編纂	◎樋	口	一	葉	定價金拾八錢					

賣文社編輯局編纂	◎近	松	巢	林	子	定價金拾八錢		
賣文社編輯局編纂	◎國	木	田	獨	步	定價金拾八錢		
賣文社編輯局編纂	◎幸	田	露	伴	定價金拾八錢			
□家庭書類□								
平塚農園主 磯部 銳著	◎家	庭	園	藝	實	驗	談	定價金壹圓拾錢
尾崎種禽場主 尾崎 密藏著	◎家	庭	養	鶏	法	定價金四拾錢		
久保田 米遷遺著	◎茶	の	湯	の	心	得	定價金八拾錢	
村井 弦齋著	◎刷	食	道	樂	定價金壹圓拾錢			

村井弦齋著	◎縮食道樂續編	定價金六圓五拾錢 郵稅金拾貳錢
村井弦齋著	◎縮食道樂附錄料理七百種	定價金六拾錢 郵稅金六拾錢
村井弦齋著	◎縮臺所重寶記	定價金六拾錢 郵稅金六拾錢
赤堀吉松 赤堀峰吉 赤堀菊子共著	◎家庭用洋食五百種	定價金七拾五錢 郵稅金拾貳錢
久保田米遷遺著 同息米齋 金僮畫	◎年中惣菜	定價金八拾錢 郵稅金拾貳錢
赤堀吉松 赤堀峰吉 赤堀菊子共著	◎家庭用惣菜五百種	定價金七拾五錢 郵稅金拾貳錢
瀨川博士述	◎增補訂正實驗上の育兒	定價金六拾貳錢 郵稅金七拾五錢
天野誠齋編	◎訂正	定價金七拾五錢 郵稅金拾貳錢

一四

松林伯知口演	◎德川榮華物語	定價金六圓五拾錢 郵稅金參拾六錢
松林伯知口演	◎德川榮華物語全三冊	定價各冊金五拾錢 郵稅金六錢
□旅行案内叢書□		
旅行趣味普及會編	◎神社佛閣名勝古蹟案内	定價金七拾五錢 郵稅金六錢
旅行趣味普及會編	◎衛生健康地案内	定價金七拾五錢 郵稅金六錢
旅行趣味普及會編	◎印度南洋濠洲渡航案内	定價金七拾五錢 郵稅金六錢
未刊	◎著名山岳登山案内	定價金七拾五錢 郵稅金六錢
未刊	◎朝鮮、滿洲、臺灣、樺太渡航案内	定價金七拾五錢 郵稅金六錢

一五

未刊

◎南哇、北米渡航案内

定價金七拾五錢
郵税金六錢

□寫真帖□

理學士
大地原誠 著

◎紙上の動物園 猿類

定價金參拾五錢
郵税金四錢

理學士
大地原誠 著

◎紙上の動物園 肉食類

定價金八拾錢
郵税金八錢

理學士
大地原誠 著

◎紙上の動物園 有蹄類

定價金八拾錢
郵税金八錢

理學士
大地原誠 著

◎紙上の動物園 合本

定價金壹圓七拾錢
郵税金六錢

新橋堂編輯局編

◎乃木大將寫真帖

定價金壹圓貳拾錢
郵税金拾貳錢

新橋堂編輯局編

◎明治天皇御大葬御寫真帖

定價金壹圓貳拾錢
郵税金拾貳錢

終

未刊

◎南^{布哇、北米}渡航案内

定價金七拾五錢
郵税金六錢

一六

□寫真帖□

理學士
大地原誠 著

◎紙上の動物園 猿猴類

定價金參拾五錢
郵税金四錢

理學士
大地原誠 著

◎紙上の動物園 肉食類

定價金八拾錢
郵税金八錢

理學士
大地原誠 著

◎紙上の動物園 有蹄類

定價金八拾錢
郵税金八錢

理學士
大地原誠 著

◎紙上の動物園 合本

定價金圓七拾錢
郵税金六錢

新橋堂編輯局編

◎乃木大將寫真帖

定價金圓貳拾錢
郵税金拾貳錢

新橋堂編輯局編

◎明治天皇御大葬御寫真帖

定價金圓貳拾錢
郵税金拾貳錢

60
511

終



新橋堂發行